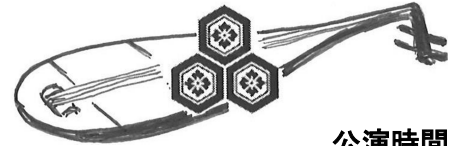


さつま はやと くにわかまる いつくしまじんじやもうで



# 薩摩隼人国若丸巖島神社詣

～ あらすじ ～

公演時間  
約 30 分程度



⑤ 驚き喜ぶ二人を迎えるように、神様のやしろには雅楽の調べとともに弁財天の舞姿も立ち現われました。



① 江戸時代のはじめの頃、島津国若丸という薩摩（いまの鹿児島県）のお殿様の若君がいました。



⑥ 国若丸と武蔵守は、神様のやしろに祈願のために用意していたお供えを捧げて、祈願成就を神様にお願いしました。



② 国若丸は戦の勝利と家内安全を祈願するため、安芸（いまの広島県）の宮島に鎮まる巖島神社に詣でることにしました。



⑦ 巖島の神様と弁財天は二人の願いを聞き入れるように、神霊を顕しました。



③ 国若丸は新納武蔵守という家老を連れて巖島神社に向かいました。道すがら、のどかな山や海の見物に美しさに、すっかり見惚れておりました。



⑧ 国若丸と武蔵守は、巖島の神様と弁財天に感謝して大喜びで薩摩の国に帰りました。



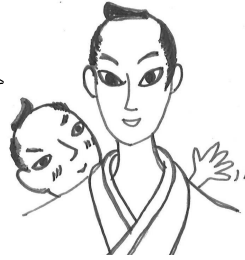
④ すると海の中から五色の水柱が巖島の尊い神様の御姿としてたちのぼり、国若丸と武蔵守は驚いてしまいました。

～ 我はこれ  
薩摩隼人国若丸と申す者  
このたび思い立ち  
新納武蔵守を従え  
安芸の国は  
巖島神社参詣申し  
祈願をせばやと存じ候  
～  
いつくしま  
安芸の宮島のどかなる  
おりたつ磯も  
ひとしほに  
四方の眺めも 遠千瀉  
拾うや花の  
さくら貝  
世のうきごとの  
わすれ貝  
みちくる汐の  
うつせ貝  
かひある神の  
かげたのむ  
～ 綿津見の  
そことも知れぬ  
波間より  
現れ出でて  
神柱立つ

八女福島燈籠人形

「薩摩隼人国若丸巖島神社詣」

国若丸と武蔵守は舞台の上では見守り役じゃがその分、われらの従者がしっかり動きます。後半の従者の動き、お見逃しなく！



今回は人形の難しい動きが見ものの舞台でござる。人形遣いの腕のみせどころぜひ、ご堪能あれ！

舞台に出演する人形のお役どころは・・・？



**弁財天** (横遣い人形)  
七福神の一柱としてお馴染みの神様。巖島神社と弁財天の関わりは深いとされています。物語の中では、国若丸たちを迎え入れ願いを聞き入れます。



**新納武蔵守** (飾り人形)  
※舞台上では動きません  
薩摩の家老。国若丸のお供として、一緒に旅をします。



**弁財天召使**  
(横遣い人形)



**島津国若丸** (飾り人形)  
※舞台上では動きません  
薩摩の若君。巖島神社に祈願成就のために詣でます。



**国若丸 従者**  
(下遣い人形)  
今回、見どころの動きです！

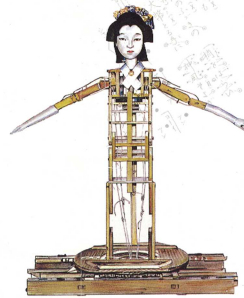
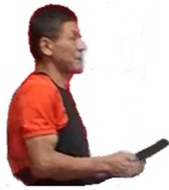
キツネは出ません！



舞台内部はどうなっているの・・・？

**〈狂言方〉**

人形の遣い手と囃子方の呼吸を合わせるのが狂言方です。舞台上下層でお互いが見えないなかでも狂言方の拍子木で間合いを整える大事な役割です。

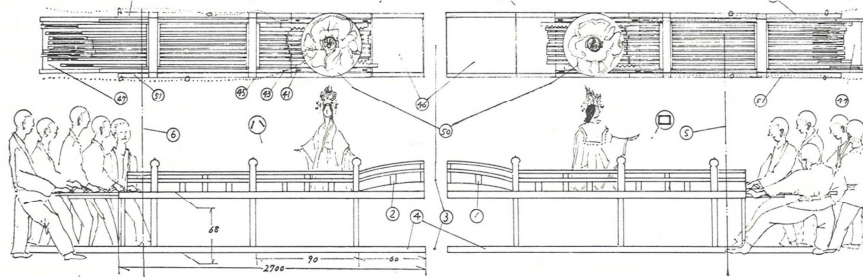


**〈唄・囃子方〉**

物語を語る唄、情景を演出する三味線、場面にいどりどりを添える鼓など。仕切り太鼓の絶妙な間合いに合わせて、それぞれが掛け合うお囃子が聴きどころです。人形の動きに合わせて進めるので、生演奏でおこないます。

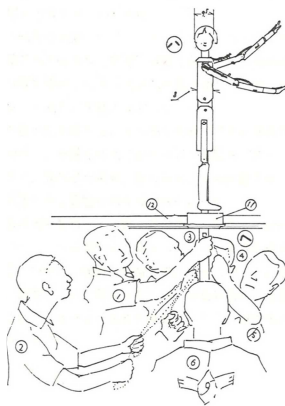
**〈横遣い〉**

左右それぞれ6人で動かします。舞台袖の離れた所から、こまやかな操作をするのはとても難しい技です。なかでも人形が左右の橋を渡る「送り渡し」は横遣いの見せどころ。左右の横いの息の合った操作にご注目！



**〈下遣い〉**

舞台の下から6人で一体の人形を動かします。見上げて操作するので体力いりますよぉ～！



**〈衣裳方〉**

衣裳の早変わり「素抜き」など、人形の衣裳は次々と変化にとんでいます。人形の衣裳や髪などを整えるお世話役です。

